

建国初期の科学研究者による イデオロギー宣伝協力についての一考察

鄭 成[†]

A Research on the Scientists' Support in the Promotion of Socialism Ideology during the Early Days of the People's Republic of China

Cheng Zheng

After taking control of China in 1949, the Chinese Communist Party (CCP) launched a nationwide campaign to learn from the Soviet Union. During this campaign, the intellectuals were requested to show their admiration to the Soviet Union in order to convince the general public the greatness of the Soviet Union's socialism. Among the intellectuals, many distinguished scientists faced a particular dilemma. Due to the ideological nature of the campaign, these scientists not only had to advertise the advances of science and technology in the Soviet Union, they also had to make harsh criticisms on the science and technology development in the western countries, where they built their academic careers. By examining these scientists' various attitudes on the cooperation with the CCP, this paper aims to illustrate a picture of the involved relationship between the distinguished scientists and the government during the 1950s.

はじめに

本論文は、建国初期、欧米留学経験をもつ著名な中国人科学研究者を対象に、彼らが科学技術の客観性とイデオロギー宣伝の狭間に置かれながらも、国が主導したソ連科学技術宣伝に協力した実態を考察する。この研究を通して、同時期における中国知識人の国家権力による政治要請への多様な協力実態を把握することを目的とする。

1. ジレンマにおかれた中国の科学研究者

1950年代の中国は、新しい国家像を目指して、社会主義イデオロギーをもとに政治、経済、文化の分野で大幅な社会改造を行った。これにあたって、中国はソ連を学ぶことをテコにしたのである。具体的には中国はソ連をモデルにし、多くの分野でソ連の権威性を確立させることを通じて、社会主義国家を建設する気運を全国範囲で高めようとしたのである。

科学技術は代表的な一例であった。この時期、ソ連の科学技術を学ぶ一環として、中ソの間に人的交流が盛んに行なわれた。1950年代は延べ1万人前後のソ連人専門家が技術援助のため、中国に派

[†] 早稲田大学地域・地域間研究機構客員主任研究員・客員主任准教授

遣された。それと同時に、ほぼ同じ人数の中国人若者が理工系学習を中心にソ連へ留学に行った。ソ連人専門家による直接指導のほか、論文、専門書の翻訳などを通して、数多くの科学技術がソ連から中国に紹介され、中国の産業化に大きく貢献した。1950年代におけるソ連による技術支援について、多くの先行研究がソ連人専門家、中国人留学生、科学技術の移転に集中する傾向が指摘できる¹。

それに対して、中国国内の科学研究者の役割についての研究がほとんど見られない。本論でいう科学研究者の役割とは、ソ連の科学技術の吸収にあたり、研究者が技術面で果たした役割ではなく、ソ連の権威性を樹立させるため、大衆向けの宣伝で研究者が行った協力を指すのである。

ソ連の科学技術の導入にあたって、中国政府はある現実的な課題に直面していた。中華人民共和国成立まで、中国の科学技術研究は長い間欧米諸国をモデルにしていた。しかし、東西の冷戦に突入したことにつれ、ソ連を全面的に学ぶことが時代の流れとなり、欧米の科学技術体系が次第に否定されるようになった。

一方、中堅の科学研究者は、その大半が欧米留学の経験者であり、欧米科学技術を否定することは、自分自身の原点を否定することになり、とても受け入れがたいことである。かといって、国全体を席卷する向ソ一辺倒という時代の流れに対して、真っ向から抵抗する科学研究者はほとんどいなかった。多くの科学研究者は、協力の程度があるにせよ、国による要請に応じ、口頭報告、論文発表の形でソ連の科学技術の先進性をアピールすることに力を貸した。国家権力が作り出した高圧的な社会雰囲気の中、研究者の協力は、その流れをさらに強化させる結果に繋がった。

このように、国家権力がイデオロギー理念をもとに国民の認識を変えていくという歴史的過程において、政治主導の動きが社会に急速に浸透したことが観察できる。この歴史的過程に関して、先行研究は国家権力による思想改造キャンペーン、言論統制を通じて、知識人への統制強化への考察に集中している。研究の対象者はほとんど人文系の研究者、評論家、作家であり、自然科学の研究者が着目されていない²。しかし、当時の科学研究者が、研究開発を実施する以外に、ソ連の科学研究をアピールし、ソ連の権威性を樹立させる面で役割を果たした事実は無視できない。本論文は科学研究者の協力姿勢を考察して、国家権力が国民意識を変える歴史的過程を新たな側面から明らかにする。

2. ソ連の科学技術を学ぶ政治的要請

向ソ一辺倒政策が中国社会を支配する中、ソ連の科学技術を学ぶことは、ソ連社会主義制度の先進性を強調するというイデオロギー的要素を次第に強く帯びるようになった。このプロセスはかなりの紆余曲折を経た。

民国時期の中国におけるソ連社会主義の信奉者は中国共産党と左翼系の知識人に限られていた。搾取のない社会を訴えて、計画経済を提唱するソ連社会主義の影響は限定的であった。欧米流の近代化

¹ 中国の生産現場で技術指導に携わるソ連人専門家に関する研究は沈志華の『蘇聯專家在中國（1948-1960）』中国国際廣播出版社、2003』が挙げられる。中国の大学でイデオロギー理論の指導に携わるソ連人専門家に関する代表的研究は、李濱（Douglas A. Stiffler）『蘇聯專家在中国人民大学（1950-1957）』（『脆弱の連盟 冷戦与中蘇関係』社会科学文献出版社、2010年、pp. 47-64）。また、科学技術の移転に関する研究は、張柏春ほか『蘇聯技術向中国的轉移 1949-1966』（山東教育出版社、2004年）がある。

² 先行研究に、張濟順『遠去的都市—1950年代の上海』（社会科学文献出版社、2015年）が挙げられる。張濟順は同書で、1950年代に上海で活動し全国的影響をもつ自由派の知識人らが、政治の急進化の流れの中で次第に発言力を失ってしまった過程を考察した。

を目指す中国は当時、社会主義を受け入れる用意はなく、一般国民はソ連に対して特別に親近感をもつこともなかった。

1945年8月のソ連の中国東北出兵と日本敗戦に伴って、ソ連は再び中国内政に深く関わるようになった。中ソ両国間の接触が指導部レベルに止まらず、ソ連進駐軍と中国東北の地元住民の間まで広がった。ソ連は、国民政府と交わした中ソ友好同盟条約をもとに、中東鉄道、大連、旅順をはじめとする中国における特殊利権を確保した。東北に進駐した後、ソ連軍が現地の工業生産施設をソ連に持ち去ったほか、略奪や女性暴行などの犯罪を多数犯し、自らの解放者としてのイメージを地に落とした。中国国民の対ソ感情が大きく悪化し、ついに1946年2月に全国規模の反ソデモが発生した。1949年中華人民共和国成立まで、中国国民の対ソ感情は良いものとは言いがたい。このような対ソ感情を変えようとして、中国政府が建国して間もなく大規模な相互交流をスタートさせたのである。

ソ連の科学技術に関して、1950年代初期まで、研究者を含め多くの中国人が情報を得るルートがなかった。それはソ連の科学技術の現状が1950年代初期の時点であり知られなく、中国の知識人に軽視された要因の一つであった。1952年年末、上海の大学関係者の間に次のような発言があったと報告されている。「ソ連は品質のよい腕時計と万年筆すら作れないから、アメリカ科学より進んでいるとは到底言えない」。これは大学の知識人のソ連認識をよく表している³。

このようなソ連認識があったのは、1949年までの中ソ間の科学技術の交流が極めて限定的であったことと大きく関連する。1920年代から30年代まで、革命を志す中国人若者の間にソ連留学のブームがあったものの、ソ連に赴いた中国人の熱血青年が留学先で精力的に勉強したのは科学技術ではなく、革命理論、政治組織の運営方法、軍事知識であった。1945年以降、戦勝国になったソ連は自国の科学技術実績を海外に宣伝する一環として、中国の研究者を招き、相互交流を始めた。ただし、内外情勢による交通不便のため、このような交流に関われたのは少数の研究者に止まった。数学研究者華羅庚の1946年のソ連訪問は、当時の中ソ交流の代表例である。華羅庚は訪問先でソ連人研究者から、数年も中断した中国の学術雑誌の送付を再開してほしいとの要請を多く寄せられた。ソ連側の手厚い手配を受けながら、華羅庚の中国からソ連までの往路が22日間、ソ連から中国までの復路が14日間、併せて往復が36日もかかった。こうしたことから、中ソ間の学術交流が数年以上も中止されたことと、当時における学術交流の困難さが窺える。

ソ連との限定的な交流と対照的に、欧米諸国の科学技術と文化が1950年代初期まで中国社会に深く浸透していた。当時の中国には、欧米留学帰りの研究者が数多くいた。聖ヨハネ大学、輔仁大学、燕京大学のようなキリスト教系大学が多数存在するほか、多くの大学は欧米の大学をモデルにした。雑誌、書籍、映画を通じて、欧米文化が先進的な工業製品とともに都市住民に親しまれていた。都市社会における欧米の科学技術、文化への親近感は、向ソ一辺倒の推進にとって大きな阻止要因となった。朝鮮戦争勃発後、アメリカ文化の影響を都市部から排除するのが当時の重要課題となったのは、それと深い関係がある。

このように、中国政府がソ連科学技術の宣伝を推し進めたのは、二つの意図が指摘できる。一つは、

³ 上海档案馆 [A26-2-144] 「上海市高等学校関于開展中蘇友好月活動的總括報告」, 1952年12月。なお、1952年11月に実施した中ソ友好月間キャンペーンについて、鄭成「1950年代初期における中ソ間の文化交流—上海の中ソ友好月間キャンペーンを中心に—」(アジア政経学会『アジア研究』第61巻1号, 2015年5月)を参照されたい。

一般的な意味での科学技術知識の普及であった。もう一つは、資本主義陣営を否定し、ソ連の科学技術の先進性を強調して、最終的に中ソ友好気運を向上させることである。後者の方は政治課題として多くの中国共産党幹部に共有されていたのである⁴。

3. 科学研究者によるソ連科学技術の紹介

中国政府が推進するソ連の科学技術宣伝に対して、欧米留学経験のある科学研究者は、政府の要請に応えるため、自分自身の研究の原点でもある欧米の科学技術を否定せざるをえないというジレンマを抱えた。この小節では、数学者華羅庚と蘇歩青、地質学者李四光、核物理学者銭三強、生物学者朱洗、及び化学者呉征鎧という6名の科学研究者を取り上げて、彼らのソ連認識と宣伝への協力を考察する。

この6名はいずれも欧米留学または日本留学の経験を持ち、世界的にも名高い科学研究者である。6名の研究者はソ連を訪問したほか、中国訪問のソ連人専門家との交流経験をもち、1950年代のソ連科学技術現状について詳しい。彼らは向ソ一辺倒の時代においてそれぞれの立場からソ連の科学技術についての紹介文章を執筆した。これらの文章は科学専門誌、新聞に掲載され、ソ連を学ぶ流れを大きく推進させた。

3.1 蘇歩青

中国の現代数学創設者の一人である蘇歩青（1902-2003）は青年時代、日本の東北帝国大学理学部数学科に留学した。1931年帰国後、蘇は浙江大学数学部で教授に就任した。1942年、高名な中国科学史研究者ジョゼフ・ニーダムが浙江大学を訪れた時、蘇歩青と交流し、蘇の才能と業績を高く評価した。1952年、蘇歩青は復旦大学に移り、数学部長、学長を歴任した。

1952年11月の中ソ友好月間キャンペーン中、蘇歩青は「ソ連科学の先進的経験を学ぶ」と題する文章を研究者、教育者向けの専門誌『中国数学雑誌』に発表した。同論文はソ連の社会主義が先進性を持っているため、その数学研究も大変優れたものであるという内容であった。蘇は論文でソ連は実用研究と理論研究の両方で優れた実績をあげただけでなく、「社会主義国家と資本主義国家の科学研究は大きく異なり」、「ソ連の科学は完全に人民のために奉仕する」ため、その数学研究が欧米の数学研究より優れていると主張している⁵。

さらに、蘇歩青は国民政府時代の数学研究を批判することを通してソ連の数学研究を称えた。蘇歩青は、国民政府時代の数学研究は「ほかの科学領域と同様、あくまでも飾り物に過ぎず、真の発展を遂げられなかった」と厳しく批判した。蘇は自分自身にも厳しい批判を向けた。「解放前、我々研究者は自らを高く見ていました。アメリカについて、研究者が大勢いて、行き届いた研究関連施設が沢山あるから、アメリカ研究者が新鮮でかつ面白い試みを次々と展開できたとして、我々はひたすら羨望していました。解放後の今、ソ連の数学は実用性を重視するあまり、理論研究ではアメリカにはる

⁴ 1952年、上海市組織部副部長の陳修良が、中央財政委員会の政策が伝えられる会議で、「技術面ではソ連をモデルにし、英米崇拜の考え方を一掃する」との中央政府の指示を受けた。『陳修良工作筆記 1952-1955年』中国出版集團 東方出版中心、2015年、p.123。

⁵ 蘇歩青「学習蘇聯科学的先進經驗」『中国数学雑誌』1952年4期、p.6。

かに及ばないと思いついでいる人がなおります」と、自分を含む同世代の研究者に厳しい言葉を向けた。知識人の自己批判と自己反省を促す中国共産党が進めた思想改造による影響がここに見受けられる。

3.2 李四光

李四光（1889-1971）は地質力学の分野を確立し、「構造体系」の概念を提起した現代中国地質学の創設者の一人である。

李四光は15歳で日本に渡り、大阪高等工業学校で6年間留学をした。24歳から30歳までの6年間、李四光はバーミンガム大学で地質学を専攻した。帰国後、李四光は北京大学地質学部教授、中央研究院地質研究所所長を歴任し、多くの研究業績を挙げた。その傍、李四光は武漢大学の創立に関わったり、中央大学の代理校長を務めたりして、学術官僚としての才能を発揮した。その能力が買われ、李は1950年代以降国家地質部部長、中国科学協会主席、中国共産党中央委員会委員の要職を歴任し、研究者と学術官僚の両方をこなした人生を送った。

李四光は1952年11月に「我々はソ連の先進的科學経験を学ばなければならない」と題する文章を発表し、イデオロギーが科学技術の優劣を決めるという論調を展開した⁶。李は同論文で「資本主義国家の科学研究は、実際の応用とかけ離れたため、ますます萎縮し、不振に陥る。一方、ソ連では科学が人民の生活需要に合わせて発展を遂げつつある。したがって、ソ連の科学研究の優越性は一目瞭然である」と鮮明な主張を展開している。

さらに、李はマルクス-レーニン主義を前面に押し出し、ソ連の科学技術の先進性を高く称賛した。「ソ連の科学研究者はマルクス、レーニン主義をつねに活用するため、知識と自信を手に入れた。そして理論の仮面をかぶった唯心論的幻想を摘発し、撃破し、機械論的唯物論の縛りを突破して、弁証的唯物論をもとに研究を進めることができました」と、抽象的哲学名詞を並べながらの論理説明を展開した。生硬な論理説明に終始するこの類いの文章は当時では一般的であった。

李四光はロシア革命以前との比較を通じて、社会主義ソ連の科学技術の輝かしい実績を強調した。こうした説教方法は、中華人民共和国以前との比較を通して、中国共産党政権の偉大さを称えるという宣伝手法と共通している。

李四光がこの時、中華全国自然科学専門学会連合会主席という要職を務めることもあり、論説は自分の専門分野に限定せず、科学技術全般を広く言及した。その中、後に完全に否定された生物遺伝学のトロフィム・ルイセンコ学説をソ連科学研究の成功例として高く評価し、とことんまで向ソ一辺倒政策に忠実に追随する姿勢を見せた。

3.3 華羅庚

華羅庚（1910-1985）は蘇歩青と同じく世界的な影響をもつ数学者である。若い頃の華羅庚は独学で大学の専門課程を習得した後、事務系の仕事に従事する傍らに数学研究の論文を次々と発表し、学界で頭角を現した。1936年、中国を訪れるアメリカ数学者ノーバート・ウィーナーの知遇を得て、

⁶ 李四光「我々必須學習蘇聯先進的科學經驗」『科學大衆』1952年12期。

26歳の華羅庚はイギリスに渡り、ケンブリッジ大学で2年間留学した。1949年まで、華羅庚は海外交流の機会に恵まれた。1946年、華羅庚はソ連とアメリカを訪問し、両国の多くの研究者と交流できた。2年後の1948年、華羅庚はイリノイ大学に教授として迎えられた。1950年春、滞在先のアメリカで中華人民共和国成立の知らせに接した華羅庚はいち早く家族をつれて帰国した。

華羅庚は1952年11月に「私はソ連でいかに勉強に取り組んだのか」と題する文章を知識人向けの『光明日報』に発表した。蘇歩青と違い、華羅庚は自分の研究経歴を中心にソ連の数学研究を紹介する。華羅庚は次のように書いてある。自分が25歳にソ連科学アカデミー会員ヴィノグラドフ（Виноградов, Иван Матвеевич）の研究に接し、それ以来はソ連科学アカデミー数学研究所から同氏の著作を届けられ、長い間大きな影響と示唆をいただいた。1940年にソ連科学アカデミー数学研究所が華羅庚の研究論文をロシア語に翻訳した。戦争の関係で、同書の出版は1946年までに待たなければならなかった。この年、華羅庚は3ヶ月にわたり、ソ連各地を訪問し、多くの研究者と交流できた。以上の経験から、華羅庚は自分は相当早い時期からソ連の科学に崇敬の意を抱きはじめてのであって、そして、ソ連についての勉強を一層深めるためにロシア語勉強を本格的に取り組まなければならない、と述べている。

華羅庚は次のようにソ連の社会主義制度を称えている。「私が一番知りたいのは、共産主義の教育はソ連でどのように行われているのか、ということ。なぜなら、共産主義の教育のおかげで、中国を訪問するソ連人専門家だけでなく、普通のソ連国民までみんな優れた資質と高尚な人格を持っているのです」⁷、と華羅庚は問いかけの形でソ連への憧れの心情を読者に訴えかけている。

華羅庚の欧米諸国に対する批判は控えめであった。「ソ連科学アカデミーからソ連訪問の機会をいただきました。これを機に視野を広げることができました。ソ連科学の日進月歩の理由もよく分かりました。アメリカとの比較を通して、ソ連科学がこのような素晴らしい実績を挙げられたのは、実は優れた社会制度のおかげだということを痛感しました」との記述から、アメリカを徹底的に批判する気配が薄いことがわかる。

蘇歩青と同じように、華羅庚も「社会主義」、「ソ連人民」というようなイデオロギー的用語を多用し、ソ連の社会主義の先進性を繰り返し称えている。しかし、ソ連の数学界との交流経験が文章に生かされているため、読みやすい文体となっている。華羅庚はソ連数学界との長年の交流を通じて、ソ連の数学研究に強い親近感と敬意を抱いた。1946年の三ヶ月に亘るソ連訪問は、当時の中国人科学研究者では珍しい経験であった⁸。華羅庚はソ連各地で多くの出来事に遭遇し、これらのことは社会主義国家のソ連にしかないと感じ止めて、深い感動を覚えた。華羅庚がモスクワ大学の図書館を訪れた時、政府高官の写真のかわりに著名な学者、文学者の肖像が壁に掲げられているのを見て、知識がソ連で大事にされているとの感想を素直に述べた。モスクワ大学で数学の応用研究が理論研究に劣らずに進められているのを見て、数学の応用研究をこれまで力強く唱えてきた華羅庚はソ連の数学研究に一層傾倒するようになった。著名な数学者の講演会に多数の中学校教員が聴講したこと、子供の数

⁷ 華羅庚「我怎樣在蘇聯學習」『光明日報』1952年11月11日。同文はその後、『中国数学雑誌』1952年第5期に転載されている。

⁸ 華羅庚が三ヶ月のソ連訪問を終えたあと、「訪ソ三ヶ月記」という文を表し、『時与文』雑誌の1947年第14期から第17期まで連載された。それによると、華羅庚は三ヶ月近くの滞在期間において、モスクワ、サンクトペテルブルク（当時はレーニングラード）、グルジア共和国を周遊した。

学教育で優れた指導方法が応用されたこと、といった実例をもとにしている。華羅庚が描いたソ連科学の現状は堅苦しいイメージはなく、一般読者に受け入れられやすい。

3.4 銭三強

中国の代表的な核物理学者である銭三強は清華大学卒業後、1937年にパリ大学キュリー研究所に留学し、3年後に博士学位を取得した。その後、フランス国立科学研究センターで研究員を務め、核分裂のメカニズムの研究で世界的な注目を浴びた。帰国後、銭三強は中国科学院原子能研究所所長、核工業部副部長などの要職で中国の核開発に中心的役割を果たした。

1952年2月末、銭は団長として中国科学院代表団率いてソ連を訪問した。三ヶ月の間、代表団がソ連の代表的研究機構、大学、工場を訪問して、ソ連の科学研究現状に接した⁹。このソ連訪問の見聞をもとに、銭三強が1954年に「ソ連の物理学に対する認識と体験」と題する文章を発表した。銭はこの5000字の文章の中で政治要請への対応と客観的現状紹介の両立を図った。

銭はソ連の科学研究現状について、「世界の最高レベルに達し、多くの分野は世界一位である」として、ソ連を学ぶことを呼びかけた¹⁰。ほかの研究者と同様に、銭三強もこの文章でソ連の科学研究を称えることを最大の目的としたのである。李四光と違い、銭三強はイデオロギー用語をちりばめるのではなく、ソ連の物理学研究の現状についての詳細な紹介に努めた。

銭は冒頭で「ソ連の科学は帝政ロシアの豊かな科学研究の遺産を受け継いだのである」と論じて、帝政ロシア時代の科学研究を肯定的に捉えた。ロシア革命以前の科学研究を完全に否定したという李四光の書き方とは一線を画した。

ソ連時代の物理学研究現状について、銭三強はソ連政府が次々と立ち上げた研究機構の運営、光学、固体物理学、宇宙線、原子核物理学諸分野の実績を詳細に説明した。専門家としての銭三強の権威が文章の信憑性を担保する形となっている。

欧米諸国の科学研究現状についての論述は、「原子核物理学の応用または高エネルギーの研究面において、ソ連の実験が多くの面でアメリカを追い越している」、「ソ連科学研究所で使用される分光器は品質面でドイツとイギリスの製品を超えている」などと、事実記述を中心に展開している¹¹。この点は、蘇歩青と李四光のイデオロギー中心の欧米批判と異なっている。

なぜソ連の科学がこれだけの輝かしい実績を上げているのか、という問いに対して、銭三強もマルクス-レーニン主義を原因にあげたが、イデオロギー論的な展開はなされていない。かわりに、銭三強は理論研究と応用研究の融合、複数の研究領域にまたがる有機的な展開、特定領域の研究を重点的に推進させることを、具体的要因として挙げている。このあたりの分析は研究者としての銭三強の堅実な一面を見せている。

3.5 朱洗

中国細胞生物学と実験生物学の創立者の一人である朱洗（1900-1962）は、1920年にフランスに

⁹ 「中国科学院關於訪蘇代表团工作的報告」『中蘇兩國科学院科学合作資料選輯』山東教育出版社、2008年、p.2。

¹⁰ 銭三強「对于蘇聯物理学的認識和体会」（ソ連物理学に対する認識と体験）『物理通報』、1954年1期。

¹¹ 銭三強、前掲文、p.2。

渡り、5年間の勤工儉学生活を経てモンペリエ大学に入学した。1932年に帰国後、朱洗は中山大学教授、上海生物研究所所員、主任などの職を歴任し、中華人民共和国成立後、朱洗は中国科学院実験生物研究所に移った。1958年の大躍進キャンペーン中、毛沢東が提唱した雀の撲滅に対して、朱洗が生物学の視点からあえて反対の声を上げたことはよく知られていた。

1950年代前半、朱洗が中国の生物学界の代表的研究者として、ソ連人専門家と交流する機会を得た。1953年2月末、朱洗はソ連訪問の経験をもとに「ソ連の先進的な動物学研究についての訪問記要」という一文を発表した¹²。

この1万字前後の文章はソ連科学アカデミー傘下の生物学系統の各研究所、キエフ大学などと多くの研究機構を詳しく紹介している。同文章には「中ソ友好」、社会主義制度の先進性、マルクスレーニン主義というようなイデオロギー用語は使われていない。

朱洗は文章の冒頭で中国代表団を受け入れたソ連科学アカデミー、ソ連人研究者らに感謝の意を述べた後、ソ連の科学現状についての勉強が不十分であるとの前置きをしてから、すぐ研究機構の紹介をはじめたのである。

朱洗はソ連の研究は応用と密接に関連していると見て、ソ連の科学研究を高く評価した。ソ連科学アカデミーの運営状況について、朱は「ソ連の生物学研究は明確な目的をもつほか、高度な組織性と計画性が備える」と評価した。ソ連の数多くの生物学研究機構について、朱洗はその概況を紹介した上、一部の主要研究機構を大きく取り上げて、詳細な紹介を展開している。これらの研究機構の紹介を終えたところで、朱洗は「我々に深い印象を残した」と述べることに止まり、詳細なコメントを控えている。

当時、ソ連の学界では、後天的に獲得した性質が遺伝されると主張するソ連生物学者ルイセンコの学説が、政権の絶大な支持を得て、支配的であった¹³。一方、長い実践を通じてその効果が広く認められたミチューリン農法はルイセンコ学説の確立に利用された。他方、メンデル (Gregor Johann Mendel, オーストリア生物学者, 1822-1884)、ヴァイスマン (Friedrich Leopold August Weismann, ドイツ生物学者, 1834-1914)、モーガン (Thomas Hunt Morgan, アメリカ生物学者, 1866-1945)らの西側の研究者によって築き上げられた遺伝学は否定の対象とされた。

中国はソ連学界の流れを全面的に受け入れた。中国のモーガン学説の支持者は批判されたり、学界から追放されたり、厳しい状況におかれた¹⁴。朱洗も例外ではなかった。1952年11月、ソ連科学アカデミー学術秘書グルシェンコ (ГЛУЩЕНКО И. Е.) が上海を訪れた際、朱と面談し、後者の研究実績を評価しながら、その観点が唯心論であるとして批判を加えた。グルシェンコが帰国した後、朱洗を

¹² 朱洗「訪問蘇聯先進動物学工作的紀要」『科学通報』1953年10期。

¹³ ルイセンコの学説がソ連政府の支持を得られて、ソ連学界の主流となった原因について、環境によって形成された後天的性質が遺伝できるという学説の内容が、社会主義新人を育てることを目指すソ連にとって都合の良い理論であるという見方がある。つまり、新しい社会で育てられた若い社会主義新人の優れた性質を、次の世代が受け継ぐことができるからである。そのほか、遺伝子の水平伝播が1950年代末に明らかにされた前、ミチューリンが大きく発展させた接ぎ木技術のメカニズムについて、西側の遺伝学でも合理的解釈ができず、分からない点が多かった。こうした状況が、イデオロギー至上の時代背景と相まって、ソ連政府が自国の研究者が提起した学説を全面的に擁護することに繋がっているという見解もある。

¹⁴ 農作物遺伝学者鮑文奎 (1916-1995) は、1950年6月にカリフォルニア工科大学より生物科学分野の博士学位を取得した後、同年の8月にアメリカより帰国した。鮑文奎はモーガン学説批判の嵐を見て、生物科学遺伝学の研究は続けられなくなったことを悟り、研究分野を農作物の種の開発に転向し、ルイセンコ学説を無理矢理に自分の研究に取り入れることを避けられた。『1950年代帰国留美科学家訪談録』湖南教育出版社、2013年、p. 36。

批判する論文を執筆した¹⁵。大きなプレッシャーに置かれた朱洗がソ連の遺伝学をいかに紹介したの
は興味深いところである。

朱洗が文章で遺伝学を言及したのは三カ所ある。一か所目は、ソ連科学アカデミーのある研究プロ
ジェクトについて、朱洗はそれは「ミチューリン学説を有力に裏付けた」と論じた。二か所目はタ
シュケントの養蚕学校で行われた鶏の精巣実験について、朱洗は「この実験は、ミチューリン学説を
有力にサポートして、ヴァイスマン、モーガンの学説を壊滅的に打撃した」とコメントした。三か所
目はルイセンコが主催する実験遺伝研究について、朱洗は「これらの実験はミチューリン理論を裏付
けたと認識されている」と述べた。この三カ所で朱洗は西側の遺伝学を否定し、ソ連の遺伝学を擁護
する立場を鮮明にしているが、擁護の対象がミチューリン理論に止まり、ルイセンコ学説を言及しな
かった。

朱洗はほかの研究者と同じように、この時点でルイセンコ学説の誤謬にすでに気付いたかもしれな
い。しかし、当時では真っ向から反対を唱えることが無理であった。この三カ所の論述は、政治要請
と研究者良識の狭間に、朱洗が見つけたぎりぎりの着地点だろう。一つ留意したい点は、朱洗がタ
シュケントの養蚕学校の鶏の精巣実験を紹介した後、「実験はまだ進行中である」と付け加えたこと
である。最終的結論を控えたこの記述は、朱洗なりの努力とみることができよう。

3.6 呉征鎧

呉征鎧¹⁶ (1913-2007) は物理化学者、放射化学者であり、中国のウラン濃縮技術開発、放射化学、
分子分光法の創始者である。1936年、呉征鎧はイギリスに渡り、ケンブリッジ大学物理化学研究所
の最初の中国人留学生となった。3年間の留学生活の間、呉征鎧は5本の論文を発表した。1939年に
帰国後、呉征鎧は湖南大学教授、浙江大学教授を経て、1952年より復旦大学化学部長を務めた。
1960年に復旦大学を離れた後、中国科学原子能研究所などの研究機構で中国の核技術開発に取り組
んだ。

呉征鎧のソ連の化学研究についての認識は、1957年に発表した「四つのソ連大学化学部と幾つか
の研究所についての訪問印象」に集約されている。呉はこの文章でソ連の大学、研究機構の組織構造、
研究課題、教育活動について詳細な紹介を行うとともに、ソ連科学研究の問題点をも隠さずに指摘し
た。

その中、レーニンград大学化学部については、校舎が小さく、設備が古く、図書館の蔵書量が
少ないと記述された。呉は「我が国の各大学は目下、蔵書量と設備の充実さのどちらもソ連のレベル
に達した(モスクワ大学まではまだ及ばない)。校舎のほうはむしろすでにソ連を上回っている。し
かし、科学研究のレベルは先方にはるかに追いつかない」。このように、呉征鎧は多くの研究者と違
い、ソ連の科学現状を手放しで賞賛するのではなく、あくまでも対等的立場から相手を観察する。相
手の長所は学び取るが、問題点も特に回避しない姿勢が伺える。

¹⁵ 上海檔案館 [C38-2-138] 「中蘇友好月弁公室、工作簡報6号」、1952年11月28日。

¹⁶ 呉征鎧「訪問四個蘇聯大学化学系和幾個研究所印象記」(四つのソ連大学化学部と幾つかの研究所についての訪問印象)『化
学通報』1957年第7期。

4. 三つの論理展開タイプ

以上の6名の科学研究者はソ連科学技術を称える点で共通しているが、その具体的な対応に大きな相違が存在した。相違の要因は、各自がイデオロギー要素をどのぐらい重視するかということにかかるといえる。対応内容に応じて、この6名の研究者を「イデオロギー先行」、「個人体験重視」、「対等的な考察」という三つのタイプに分類できる。

4.1 イデオロギー先行

李四光、蘇歩青の2名をイデオロギー先行型に分類したのは、両者ともソ連の科学技術が優れている原因が社会主義制度にあり、欧米諸国の科学技術に対して完全に否定するという論調をとったためである。つまり、科学技術の優劣がイデオロギーに決められるという説明論理である。このような説明論理が繰り返されるなかで、イデオロギー至上の時代の雰囲気ますます強化されていった。

4.2 個人体験重視

華羅庚と銭三強の2名は、イデオロギーの視点から社会主義国家と資本主義国家の科学技術の優劣を論じる手法を取り入れたが、説明論理はあくまでも個人的体験、見聞を主体としている。過去の国民政府時代との比較を通して、現在の人民共和国の素晴らしさを唱えるという論理もしばしば登場する。この二つの説得方法が、純粋なイデオロギー宣伝に抵抗感を覚える読者にとっては比較的受け入れられやすい。

4.3 対等的な考察

対等的な考察と名付けたのは、朱洗と呉征鎧の2名が努めて客観的、中立的立場からの考察を通してソ連の科学技術現状を把握しようとしたためである。ソ連の科学研究現状の紹介にあたって、朱洗と呉征鎧はイデオロギー要素の強い言葉を避けて、詳細なデータを説明材料に使うことに努めた。二人は対等的立場からソ連を学ぶことに臨み、ソ連の先進性を認めながら、手放して称えることはしない。強い政治要請に対しては安易に妥協せず、ぎりぎりまで研究者の良識を保とうとしたのが、彼らの特徴である。

まとめ

本論文は、ソ連を学ぶ政治キャンペーンが中国社会を席卷した中、ソ連の科学研究を称えて、その権威性を確立せよという国家の政治要請に対して、研究者がいかに対応したのかを考察した。ソ連の科学研究を称える政治要請から派生した欧米の科学研究への否定要請を、研究者たちが各自にいかに対応したかは、考察のポイントの一つとなっていた。

ソ連科学技術の先進性宣伝に協力した研究者の対応はまちまちであった。社会制度が科学技術の優劣を決めるといえるように、イデオロギーの要素を前面に打ち出した研究者もいれば、イデオロギーを主張しながら、個人の経験、見聞を通じて説明する研究者もいた。また、イデオロギーを慎重に避けて、客観的な説明に努めた研究者もいた。

イデオロギー先行の対応は当時の主流となった。権威性が高い研究者らが率先してイデオロギー先

行の説明論理を応用すると、この類いの文章がたちまち氾濫しはじめた。国の政治要請は満たされて、ソ連を学ぶ気運が一層高まった。このような流れが一旦形成されると、1950年代後半の中国社会が次第にイデオロギーに支配されるようになった¹⁷。

以上で取り上げられた研究者らは、みな欧米の留学経験者でありながら、なぜ国の政治要請への個々の対応が大きく異なっていたのか。次の研究課題は、研究者の経歴、対外認識、価値観との関連性から対応相違の原因を考察したい。さしあたり指摘しておきたいのは、イデオロギーの要素を強調する人ほど、クラスの高い役職につく傾向がみられることである。

¹⁷ このような実例は1950年代後半の油田開発が挙げられる。中国は1950年代後半より国内で石油の埋蔵地の発見を機に、大規模な油田開発が進んで、一躍して石油の自給を実現する産油国となった。この時期、中国政府は、西側の地質学界はつねに中国に石油の埋蔵がないとの「中国貧油論」を唱えてきたが、中国の油田開発は西側の偏見を見事に破った、という論調の宣伝を展開した。このような宣伝は当時、国民の士気を鼓舞するのに効果的であったが、純粋の科学理論の相違を政治的対立の次元で解釈する傾向がある。このような宣伝はとてつもなく現実離れの経済目標を掲げて、経済活動の自然な規則を無視し、無謀なキャンペーンを強行した結果、おびたしい犠牲者を生み出した大躍進の遠因だと言っている。